

目を末法暗鈍の衆生に與へ無限の慈悲を以て、凡夫即是佛身の意義を顯揚し、凡夫の心王を悟らしめ給ひしは宗祖日蓮聖人の觀心本尊の大曼荼羅觀そのものである。十界盡く凡夫の己心に具足し、本佛釋尊眞極の智である妙法蓮華經こそは生死解脱の本法である。一心唱題、不借身命、但借無上道の信こそ事理懺悔を具合し自然に、色心清淨を持たしめる本門の戒である。末法無戒と雖も、無戒を着てはならない。一心唱題不借身命こそ無戒の佛戒である。十界羅列の大曼荼羅は凡夫の本體たる妙法蓮華經の体用の顯現であり、四聖六道の法界己心に具し、妙法蓮華經の光明に照されて本有の尊形となるのである。我等が九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に具はり眞の十界互具一念三千は壽量品の顯本、引いて凡夫の法体の顯本である。かくの如く本佛の家が子である我等は本佛と共に臥せ、本佛と共に起き、父は三世常恒に慈眼を以て衆生を視たまひ、每自作是念の每自悲願を以て常に迷へる子供を導く事を忘れ給ひし事はない。大慈の心は日々に新に湧き出で我等を守り給ふ。佛、菩薩の慈悲は常に盡き給はぬであらう。我等は一心欲見佛の信を以て自然に戒の本然に歸入する時我執、煩惱の雲、自然に晴れ、菩提清涼の月が現はれ、無價の寶珠たる心性の靈光が現はれる。この遠塵離垢の心を以て萬象を觀る時、一念法界に滿ち亘りて、青巖白石のほとり無心に去來する白雲もわが心にあり、大空に燦たる光芒を放つ明月の平等無礙の光は我が心中の靈光である。娑婆即寂光と云ふも本化の心觀を離れて存在し

得ないと共に、南無妙法蓮華經と唱へ奉る心地即ち煩惱即菩提生死即涅槃であり、佛教の眞髓を顯發されたる本門の觀心そのものである。宗祖聖人の觀られたる十界森羅萬象と云ふものはこの大宇宙を以て、無始本有の本佛の家とし、本有常住の九界すでに本佛果海に攝取され、恩寵を恣しまゝにしてゐる法悅觀であり、こゝに至つて觀の究竟地を見出す事が出来るのである。佛陀の不滅を信ずる事は、そのまゝ自己の不滅を信ずる事である。人生は嚴肅なる因果の理法の上に立ちて、而かも永遠不滅である。我等は汚濁、我執を離れて肺肝を淨化し、八面玲瓏たる心田の妙法の五字を以て、本佛の慈悲を仰ぎ自己の生命をして、その貴い本性を發揮し一路向上の道を辿らねばならないのである。

山麓居詠

帶金 一義

たちまちにわれを包めりい對へる山々既に
深き霧の中
峽小村ひとと灯りぬ一面の芒穂白き波立ち
はるけく
瀧しぶき吹きあぐる淵にゆれやまぬ山菊の
花の寂けく明るき
丘腹の風にふかれて村人ら働ける見ゆやや
白々し
窓障子とほしてさむき寒曇り裏山近く鳩鳴
くこゑす